

スペイン初期キリスト教美術の源流

～西ゴート美術について～

池 川 直

(1998年9月30日 受理)

The Early Stages of Chistian Art

～ The Art of Visigoth ～

Sunao IKEGAWA

はじめに

古代ギリシア、ローマ（紀元前1世紀から紀元後5世紀、476年8月23日西ローマ帝国滅亡）にかけて、人間をその解剖学的正確さという枠の中でいかに美しく表現するか、このことが芸術家にとり最大の課題であった。人間だけでなく神ですら人間の形に置き換えて表現した。一方、その時代、その地域において、ユダヤ教をその源にするキリスト教を信じる人々がいた。彼らは、神は物質界を超越しているものであり、これを人間その他具象的な形で表現することは誤りであるとして、神やキリストを単純な記号や象徴的な形でしか表現しなかった。そのことは300年頃のグラナダ宗教会議における「聖堂の中に絵画が描かれてはならぬことを定める。崇められ礼拝されるものは、壁に描かれてはならないからである。」の宣言により明らかである。^(註1)人像否定のユダヤ的伝統の「宗教像の禁止」により表現の題材は、七枝の燭台、三叉の銚（もり）にからみつくイルカに限られた。その後、313年コンスタンティノス帝のミラノ勅令により、キリスト教教会と国家の結合が宣言されるに至った。紀元1世紀より歴代のローマ皇帝より迫害を受けていたキリスト教及び、キリスト教徒による初期キリスト教美術は、このときより新たな展開をしていく。そして10世紀後半にはロマネスク期というキリスト教美術にとって華やかな時代を迎えることになる。

イベリア半島においてもこの流れが、顕著に見られる。筆者が1997年7月29日に訪れたレオンのサンイシドロ教会（Colegiata de San Isidoro）内の、ROYAL PANTHEON（パンテオン美術館、歴代のレオン王、王女の墓室、1063年）の側廊で展示されていたそれ以前の教会の発掘現場写真にその時代の遺構が見られた。年代からすると西ゴート族が、イベリア半島に建国した西ゴート王国（415年～711年）のものとされる。ここでは紀元1世紀から始まったゲルマン民族の大移動期の中で、大旅行を経てイベリア半島にたどりついたこの民族が何を考え、何を残したのかを検証していく。また彼らが残した造形を彫刻制作者としての筆者の眼で考察してみたい。

(1) 西ゴート族 Visigoth の起源

西ゴート族の起源となるゴート族は、スカンジナビア半島、現在のスウェーデン南部を現住地としたゲルマン系の一部族とされる。紀元前後、南下を始めバルト海に面したヴィスワ川流域、現在のポーランドに移住した。その後、150年頃さらに南下を始め黒海の北部と西部でドナウ川北側の下流域に移動した。黒海の北部に移動した民族が「東ゴート族」であり、黒海の西部、現在のルーマニア付近に移動した民族が「西ゴート族」である。

この二つの部族ならびにその他のゲルマン民族は、当時のローマ帝国からは「蛮族」と呼ばれたが、帝国の運営の維持からその軍事力は、ローマ帝国の傭兵として利用された。

その後の375年黒海の東部にいたフン族の西への移動は、この二つの部族の将来を分けた。東ゴート族は、イタリアの北部に侵入することになる。476年西ローマ帝国崩壊の後、東ゴート王テオドリスキは493年ミラノを占領したが、553年東ローマ帝国（ビザンチン帝国）に滅ぼされた。一方西ゴート族は、バルカン半島から401年イタリアに侵入、410年ローマを占領した。360年頃からローマ文化と接触し、すでにアリウス派キリスト教徒であった彼らは、帝国との関係を保ちながらさらに、418年協定を結び西のガリア地方、現在のフランスのトゥールーズに王国を建てた。その後、イベリア半島に領土を増やしていくことになる。507年フランク族とのポワティエの戦いに敗れ、南仏とピレネー山脈を越えたイベリア半島の中心部に再び移住して、トレドに王国を建てた。王国の首都がトレドに移ることでローマ人からの支配や依存から逃れ、独自の文化や経済をもつ「西ゴート王国」は、711年イスラム教徒に滅ぼされるまで300年もの間続くことになる。移住してきた当時わずか20万人のゴート族は、多くの土着のイベリア人を支配しなければならなかった。そのためには、キリスト教の布教は有効であったとされている。しかしながら、支配者と被支配者との構図は依然として存続した。このことが経済、軍事力を弱体化させ、イスラム教徒の侵略を容易にさせ王国の滅亡を早めさせることになった。

(2) 西ゴート族とキリスト教

紀元前1世紀にローマの将軍カエサルが書き記した『ガリア戦記』^(註2)によると、西ゴート族の起源となるゲルマン人は、太陽や火、また月、あるいは木、森、泉などの自然界を神としたとある。その彼らも同様な自然界の神を信じながらも、民族の移動とローマ帝国との接触によりキリスト教化していった。まず、彼らの最初に移り住んだローマ帝国の東方の地域は、アリウス（250年頃～336年頃、エジプト北部のアレクサンドリア教会の長老）が主張するキリスト教^(註3)の影響が強く、アタナシオス（296年頃～373年アレクサンドリア教会の主教）の唱えた説^(註4)が381年コンスタンティノポリス公会議において正統と認められることになるが、彼らは589年の第3回トレド宗教会議までアリウス派のキリスト教の信仰を依然続けていくことになる。彼らがその後移り住んだローマ帝国領であったイベリア半島においては、その後2世紀に渡って二重のカトリック文化をもつことになったわけである。その結果、元来もつ自然崇拝の思想とこの二重のカトリック思想の中で独自のキリスト教文化を形成していく。このことは、彼らが残した金属工芸品に見ることができる。

(3) 西ゴート芸術の特徴

西ゴート芸術は、ビザンチンの東方的伝統、ローマの初期キリスト教的美術、ゲルマン民族の伝統、それにスペイン土着のケルト・イベロの伝統の融合したものとして位置付けられている。

ブルゴス北東40キロのキンタニーヤ・デ・ラス・ビーニャスにあるサンタ・マリア教会堂内の浮き彫り彫刻「キリストを讃える天使」(図版1)(7世紀末頃)見られるキリストとその子達(天使)の身体には、いずれも細かい溝彫りを各部ごとに平行に連ねた衣の表現に、特有の表現が見られる。「キリストや2人の天使の彫像の三次元空間は、厳しい線での解釈のために、三次元としての立体さは、全くといっていいほどない。背景も完全に平たい。デザインは非対称形である。キリストの右の天使は、左のものより開きがやや広くとられていることがわかる。天使の羽は、1枚の羽しかないことがわかる。その羽で、交差した両翼を1枚のものとして表現されている。キリスト像は厳密に正面性で彫られ、彼の右手に十字(クロス)をもたせている。」(註5)

この彫刻をした彫刻師についても次のように述べられている。(註6)

「この彫刻をした彫刻師は、(古典的な伝統的感觉を意識して避け)不完全さよりも故意的な仕事をしていた。彼はまた、荒く、不完全、未完成ともいえる縁取りの造形にも2本の幅広い帯で変化をつけた。」このように一見未完成作品のような作風は、ある種の稚拙さではなく作者の制作意図を明確にさせる意識を持った表現として評価されている。

さらに祭室のアーチの外壁フリーズ(図版2)には、図式的表現が強い動物・植物の浮き彫り表現が見られる。孔雀、水鳥、有翼、無翼の四つ足獣などの題材は、オリエント的でありビザンチンの影響を受けていると考えられる。

イタリアのチビッダレー(イタリア北東部フリウリ地方)のサンタ・マリア・イン・ヴァルレ教会堂の入口の壁の774年の制作と推定されている大理石浮き彫りに、前述のキンタニーヤ・デ・ラス・ビーニャスにあるサンタ・マリア教会堂内の浮き彫り彫刻「キリストを讃える天使」(図版3)(7世紀末頃)の特徴である衣紋の図式的表現に類似していることが見て取れる。ただ、衣紋は、平行線の図式表現でなく、文様が表されており、交差した天使の羽もはっきりと2枚の羽で構成されている。711年イスラムにより王国が滅亡し、西ゴート族は北部スペイン(首都オビエド)にアストリアス王国を建てたが、一部のゴート人はビザンチン帝国を頼ってイタリアに移住して、この様式を伝えたと推測できる。このことは次の機会において考察してみたい。

7世紀に制作されたというこれら人像の表現は、それ以前は特に見出せない。現在の私達は、ギリシア・ローマの古代彫刻のなかに彫刻造形表現として揺るぎない彫刻観を持ち、10世紀ロマネスク彫刻の人像表現の中にも同次元の造形意識を持っている。一方ゲルマン人は現実界の形を再現することに意味を持たず、キリスト教時代に入り、自然物崇拜を絶とうとして抽象形による象徴が多く見られるようになる。ゲルマン人の彫刻観がギリシア・ローマの彫刻観とが根本的に違うことを意味するのではないだろうか。

プロティノス(ギリシアの哲学者205～269/270)の著書『エンネアーデス』の中でその造形性

について次のように表されている。「像は鏡のごとく対象を写すものであるが、それは単に対象の外観を写すだけでなく、「ヌース」(霊ないし知)を映すべきである。ヌースのみが真に実在するものだからである。ヌースを映すべき画像においては、「奥行」や「陰影」の表現は軽視され追放されなければならない。そしてつばら色面を用いるべきである。そこではすべての部分が明るく照らされ、したがって影はなくなるのである。」^(註7)このことは、ギリシア・ローマの古典主義絵画の原則であった三次元の物質的世界の表現、透視図法や明暗法を否定したものであり、色彩は単なる視覚的意味だけでなく、精神的内容の象徴であることを述べている。その後のロマネスク絵画の基になっていくことを意味するものとして貴重な言葉として考えられる。

(4) イベリア半島における西ゴート族の遺構と造形物

① 建築・彫刻

711年より始まるイスラム勢力の侵攻により、西ゴート族は半島北部に逃げ延びてアストリアス王国(718年建国～910年分裂)を建国することになる。そのために教会建築の大部分はイスラム建築様式化されたり、その後ロマネスク教会に建て替えたりして完全な遺構を残している教会は数少ない。

この時代の建築例として次の教会が挙げられる。

・サン・ペドロ・デ・ラ・ナーベ教会(691年頃)レオン北西100キロの町サモーラ(図版4)

・サンタ・マリア・デ・ラロス教会(7世紀末)ブルゴス東40キロの町キンタニーリャ・デ・ラス・ビーニャス

・サンタ・コンバ・聖堂(672年頃)オレンセ地方オレンセ北40キロの町バンデ(図版5)

遺構:サン・ファン・パウティスタ教会(サン・ファン聖堂)バレンシア北20キロの町ベンタ・デ・バーニョス

建築上の特徴としては、祭室に対し、前室、さらに南北に側室を持ち、相対的に高くつくられている。祭室は、半円形でなく方形が原則であり聖堂内部は細分化されている。このことは、祭室における儀式的秘儀性を高めるため、典礼に参加する修道士を隔離する役割を果たしたとされる。また、厚い壁と小さい窓も特徴で、浮き彫り状の装飾壁面や柱頭、柱身彫刻により室内は装飾されている。

サン・ペドロ・デ・ラ・ナーベ教会、内部(図版6)は、馬蹄形のアーチで構成されており図版正面のアーチが祭室中心への唯一の入口になる。左右の身廊側からは、祭室の際にはアーチに覆いのベールをかけられると祭室中心には行くことができず、そのために秘儀がとり行われることを可能にしたつくりと言える。左右の柱の上部、柱頭部には聖書の説話的場面「獅子の穴にいるダニエル」(図版7)、「アベラハムの供犠(イサクの犠牲)」(図版8)などの人像表現が見られる。前述したサンタ・マリア・デ・ラロス教会(7世紀末)の「キリストを讃える天使」での表現方法ときわめて類似性を持っていることがわかる。いずれのものも枠の中の、限られた空間の中に、また平面性を損なわない浅い彫りが意識されて表現されている。このことはギリシャ・ローマでの人体表現とはまっこうから反する理念で表現されたものと理解する。つまり人体の現実の比率や輪郭と

いったものを無視し、三次元性を否定したことが考えられる。

② 金属工芸

西ゴート芸術を理解する上で最も重要なものとして金属や宝石類の工芸品が挙げられる。これらのものは、墳墓の副葬品として亡くなった王や妃とともに墓に埋められたものであり、彼らがキリスト教化していく過程において主題や模様とその意味を附加していった。その後の聖遺物箱、十字架、聖書の外装、聖杯等の装飾意匠にそのことが具体的に表れてくる。ゲルマン人が動いたとされる地域から出てくるこれら遺物は、共通点を持っている。元来ゲルマン人は、神の姿を自然の中に求めた。そのことがギリシア・ローマ人と基本的に異なっていることは、先に述べた通りである。つまり彼らの神は自然の姿であり、彼らの理想とする動植物を題材に選んだということがこれらの中に明らかに見られる。特に鳥型（主に鷲）をしたブローチは、黒海、イタリアなどの西ゴート族が移動した地域に広く見られる。より高く、広く移動できる鳥に憧れと畏敬の念を持ち、それを神として敬ったことが推測される。現在でもゲルマン系の諸国のデザイン意匠にも多く見受けられるのは、興味深いことである。

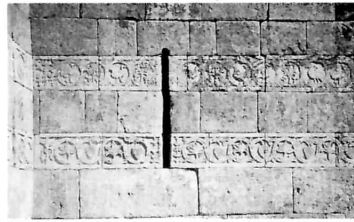
残された金工品の題材となった動植物は、自然の形にただ表されたのではなく、抽象的に表されている植物文に見られるように「象徴的」に表されている。また貴金属や宝石類もふんだんに使われている。このことは、題材が貴金属や宝石類をいっそう際立たせた要素と言える。王冠やバックルといった身に付けることが神への崇拝であり、その後キリスト教化していく中で貴金属や宝石類の色彩や輝きがそのものが「題材」や「主題」であり聖なるものの「属性」、その象徴として意識された。

おわりに

私達彫刻家が最も関心をはらって研究し続けている時代である10世紀後半からのロマネスク期は、突如としてギリシア・ローマ期から表れたものでない。ローマ帝国に異教とされ迫害されたキリスト教は、ゲルマン民族の大移動により危機感を持った同じローマ帝国の庇護のもと、別の神を崇めていたゲルマン人達によってヨーロッパ各地において彼ら独自の宗教観でもって広まっていった。彼らはローマ帝国の人々とは違った造形感覚を持っていた。そのことが来たるロマネスク期を築いたといってもよい。彼らの中の一部族である西ゴート族は、ローマ帝国東部からの大旅行を終え、彼らからすると辺境のイベリア半島に自らの信じようとするものをキリスト教に見出そうとした。そのもとになったのはいうまでもなく東方のビザンチン文化であり、その後の異文化であるイスラム教の影響を柔軟に受けとめ、融合させていった。滅亡後、過去の栄光を求めて北部に独自の王国であるアストリア王国を再び建国してキリスト教文化の存続に努めた。他のゲルマン諸国がイスラム勢力と対決することになるが、この王国は優れたイスラム文化を受け入れることによりその後のスペイン教会建築様式であるムデハル様式を生み出すことになる。^(註8) 東方ビザンチン文化とイスラム文化の融合された文化とそれらを成熟させていった風土は、独特のロマネスク教会とそこに掲げられる絵画や彫刻を形成させていくことになる。



図版 1



図版 2



図版 3



図版 4



図版 5



図版 6



図版 7



図版 8



図版 9
ニュルンベルグの東ゴート族のわし型ブローチ



図版 10
ディエラ・デ・パロス
出土のもの



図版 11
アラゴン地方
カラタユー出土



図版 12
ブルガリア
ベトロッサ出土
わし型の金製ブローチ
東ゴート族のもの

- (註1) 人像を否定したユダヤ教的な伝統を守る宣言として出されたもの。大系世界の美術第10巻初期ヨーロッパ美術 P211より抜粋
- (註2) 既に南フランス海岸地域を属領としていたローマが、前58年以降ガリア人（ケルト人）の一部族であるヘルウウェティー族（スイスに居住）の移動を契機にガリア（おおむね今のフランス）全体を征服していく過程を述べた戦勝の記録。全8巻。
- (註3) 三位一体論、つまり神は一つであるが、父・子・精霊という3つのペルソナ（位格、キリスト教で知恵と意思を備えた独立の主体）を持つというキリスト教の論理。父－神、子－神の生んだ子イエス、精霊－神の霊という説がある。そこでこの論におけるキリストの神性に関してそれが神と同じ性質か、似た性質かという論争が行われた。これをアリウス論争といい、アリウスは「主なるキリストが、神によってつくられたのではなく、神から生まれたものとしても、それは父なる神とは同じではないはずである。」と説いた。
- (註4) 325年ニカイアで開かれた公会議で採択された「ニカイア信条」。「神が父であり、子であり、精霊である三位一体論の立場から、子なるキリストは神と同質である。」という論。
- (註5) 世界美術大全集7 西欧初期中世の美術
- (註6) 大系世界の美術第10巻初期ヨーロッパ美術 P.211より
- (註7) キリスト教との統治下にとどまったイスラム教徒。その影響を受けたキリスト教建築。その対照的な言葉として「モサラベ」がある。モサラベとは、イスラム教支配下のスペインのキリスト教徒の表現様式を指す。

参考文献および資料

- ・世界美術大全集7 西欧初期中世の美術 小学館 1997年
- ・大系世界の美術第10巻初期ヨーロッパ美術 学研 1974年
- ・「人類の美術」民族大移動期のヨーロッパ ジャンポールシェ他著 1970年
- ・ヨーロッパ歴史地図 M. アーモンド他著 原書房 1995年
- ・ゲルマンとローマ 長友 栄三著 創文社 1995年
- ・GUÍA GENERAL VOLUMEN II Museo Arquelógico Nacional
- ・Dictionary of Art by JANE TURNER Macmillan Spain, §IV, 1: Sculpture, before c. 1500, Spain, 1996年
- ・§IV 2: Objects of vertu: Jewellery 1996年
- ・キリスト教の本 学研 1996年
- ・世界の生活史 23 民族大移動から中世へ 東京書籍 1986年
- ・同上 24 イエス・キリストの時代
- ・同上 26 ローマ軍の歴史

図版 1～12

- ・世界美術大全集7 西欧初期中世の美術 小学館 1997年より複写